

とが許され、家族への思いを託して、いつの日か祖国日本へ帰る日を夢見て毎日苦しい苛酷なシベリアの生活に耐えた。

待ちに待った日がきました。二十四年八月三日、帰国は名優丸にて帰りました。列車のお客さんの中に知っていた人が乗っていました。そこで「只今帰って来ました」。その客は驚き、よくまあ帰ってきたね、と元気な姿を見て驚き、早速みんなに知らせなくてはと、電車が止まると足早に改札を出る。待っていた村の人たちでした。挨拶も言葉にならず涙が止まらなかった。

## シベリア抑留の思い出

新潟県 小出 定平

昭和二十(一九四五)年一月朝鮮会寧部隊第一機関銃中隊に入隊、毎日山城山に軍事訓練を受け一期検閲修了。戦時編制を組み、第一小隊第一分

隊に編入(小隊長飯島、分隊長金沢)ソ連国境に近い山中に入り毎日ハッパをかけて穴掘り陣地構築。

昭和二十年八月十五日陣地より下山し、大隊全員集合終戦を知らされたのが八月十七日昼ころである。急な話でこれからどうなるのか。食欲はなく一同涙も出なくて、立ちすくむだけ。それから大隊長引率の元に毎日毎日歩いてトモンに着き武装解除を受けた。その数日後また歩いてカントンに集結。テント暮らし一カ月くらい後に編制を組み、また毎日野宿をしながら歩きソ連領地の小高い丘にてしばらく野宿。

それから貨車に乗せられてコムソモリスクでダンプカーに乗り、着いた所が荒れ果てた三〇一収容所、落ち着いたところで炊事の手伝い。舎内当番(後で医務室の故野村先生と一緒に)、体調が良くなり二級になって外の作業に出される(建築小隊高橋さん)。最後の作業はエポロン駅で基礎から一階部分を終わり二階部分にかかったころ二

十二年八月十四日夜、鈴木副官（現岡村さん）よりダモイ命令が知らされる。日本に着くまであてにならない？ 冬枯れの始まった三〇一を後にダンプカーに乗せられ貨車に乗せられコムソモリスクを通り、果てしない草原、木も見えない広野に出る。所々に牛の群れ、干草を作る農夫が見えた。

ハバロフスクを通りナホトカ港に向かって旅をする、着くまで期待できない旅である。無事港に着いた。九月に入るとだいぶ寒くなってきた。十日くらいして信濃丸が迎えに来て乗船し、初めて日本に帰れる実感、がしてナホトカ港に別れを告げ舞鶴に向かって出航、九月十一日舞鶴上陸。佐渡おけさに迎えられて。

九月十八日晴れの日、母兄姉の待つ我が家に。その日は村のお宮の秋祭りであった。

## シベリア抑留の思い出

新潟県 佐藤 武雄

昭和十九（一九四四）年徴集、同年一月二十日新発田十六連隊に入隊。一週間後列車と船で北朝鮮会寧部隊に到着する。

会寧にて教育を受ける。中隊長は原島大尉だと記憶しております。

七月頃旧ロシアとの交戦あり。重機を持って農家に泊まる。翌日命令により中隊に帰れと言われ中隊に帰ったところ、中隊は司令部に入る穴を掘っていた。昭和二十年八月終戦となった。

自動車と列車を乗り継いで一週間くらいかかり三〇一収容所に到着した。冬のため作業はだいたいの薪集めや各部屋の修理で終わる。また建築、鉄橋等のセメントの型枠作りやシベリア鉄道を作りレールの高低の修正などをしていった。コムソモリ